

「父親が三人、母親が二人いる。家族の形態は十七年間で七回も変わった。」身近な人にこう告白されたときあなたは思うだろうか。私はきっと「大変だったね」と、勝手に苦労を想像してしまうだろう。しかし、本当のところは当事者しかわからない。家族形とは愛し方とは「こうあるべき」と決まりがなくて当然だと本書は私に教えてくれた。

主人公森宮優子は、幼いころから何度も親が変わった。生まれたときは水戸優子、その後田中優子、泉ヶ原優子を経て、今は森宮優子と名字が四回変わるという複雑な環境で育つ。現在は、血のつながりのない三十七歳の父「森宮さん」と二人で暮らしている。実の母は幼いころに亡くなり、実の父とも小学生の高学年の頃に離れた。生みの親が、血のつながっている親が本物だとしたら、優子はその家族で過ごした日々は短い。しかし、優子の人生は全然不幸ではなかった。彼女が出会った親たちは、血のつながりを超えて、彼女に深い愛情と優しさを注いでくれた。そして優子は結婚をきっかけに親めぐりの旅に出る。そして、親から親へどのような思いが伝わり、バトンが渡されてきたか知った時思わず涙してしまうだろう。優子の人生を通して、家族とは何かを静かに問いかけてくれる物語である。

本書は、主に高校生の優子の軸と彼女が歩んできた過去の出来事が交差しながら進んでいく。そのテンポがちょうどよく、読者も自然と優子の視点に寄り添うことができる。私自身、彼女の境遇に重ねながら、自分の過去を振り返る時間が何度もあった。「この年齢の自分が優子のような家庭環境だったら、どう感じていただろう」物語を読み進めながら想像した。自分を重ねながらともに読み進められるため、優子の家族の温かさが共有され胸がじんわりと満たされた気持ちになる。

本書は年を重ね経験を積むごとに感じ方が変わっていく作品だと感じる。ぜひ、小学生から大人まで幅広い年代に手に取ってもらい、何度も読み返してほしい。

## 審査委員による講評

情報学部准教授 浦山 康洋

私は本作品について予備知識が無い状態で本書評を拝見した。書評は全三段落で綺麗に区分けされており、筆者の几帳面さが伝わった。最初の段落ではキャッチーなフレーズを使って読者の目を惹きつつ作品の魅力を伝え、次の段落でストーリーのあらすじを紹介、そして最後に作品の講評、といった流れであった。文章は読みやすく伝えたい内容も段落ごとに明確であることから、読み手に混乱を与えることなく、紹介文が頭にスッと入る良い書評である。